

第1回 日本漢字能力検定 試験問題

氏名

準1級

解答は、現代仮名遣いによるものとする。

解答は別紙(答案用紙)に書くこと。

(一) 次の傍線部分の読みをひらがなで記せ。(30)
1〜20は音読み、21〜30は訓読みである。

- 1 山中に残鶯の音が響く。
2 勅命により国師の徽号が贈られた。
3 火箭が神事の開始を告げる。
4 大魚が釣餌に喰らい付いた。
5 海軍の工廠があつた地を訪れる。
6 賢兄の劉覽に供する。
7 註疏の類を参看する。
8 問い詰められて遁辞を弄した。
9 言葉巧みに世人を籠絡する。
10 ここかしこに竈煙が立ち上っている。
11 絹糸の屑から紬紡糸を精製する。
12 割烹着を着て立ち働く。
13 息子の結婚式に甥姪が勢揃いした。
14 次第に肇国の精神が忘れられた。
15 父と祖先の御霊屋を禰祖と言う。
16 眼前に湛湛たる湖水が広がる。
17 村の老爺に昔話を聞く。
18 五百尺前後の山々が聯互する。
19 徐歩して柴荆を出す。
20 吾謹んで其の蚤牙を逃る。
21 天井に柾目の板を使う。
22 小春日和で海は凩いでいた。
23 防風の生け垣に黒檀を植える。
24 次々と杭を打ち込む。
25 失敗しないようにお呪いを唱える。
26 対岸の大岩の辺りが漣になつてゐる。
27 他に擢んでた才能を發揮する。
28 叛くのは本意ではなかつた。
29 天を怨みず人を尤めず。
30 雪中の松柏愈々青々たり。

(二) 次の傍線部分は常用漢字である。その表外の読みをひらがなで記せ。(10)

- 1 一族の長と目されている。
2 心に残つた件をじっくり読み直す。
3 馴染みの店で骨董品を購う。
4 ギャンブルに現を抜かす。
5 人生を長い旅に準える。
6 厳しい警戒網を潜り抜けた。
7 お気遣いいただき誠に辱い。
8 周知知れ渡つてゐる。
9 会議の内容を具に報告する。
10 応に出馬すべき時である。

(三) 次の熟語の読み(音読み)と、その語義にふさわしい訓読みを送りがなに注意してひらがなで記せ。(10)

- ア 1 卦兆 2 卦い
イ 3 峻嶺 4 峻い
ウ 5 謬説 6 謬る
エ 7 羞悪 8 悪む
オ 9 沈毅 10 毅い

(四) 次の各組の二文の()には共通する漢字が入る。その読みを後の()から選び、常用漢字(一字)で記せ。(10)

- 1 (1) 皇として席を立つた。 (2) 列車が穀(1)地帯を走る。
2 (2) 税を課せられる。
3 やつと意味が(3)捉できた。
4 知る人ぞ知る(4)学の士である。
5 互いに牽(5)し合つてゐる。
6 運転を自動的に(5)禦する。
7 いん・こう・こく・せい
8 そう・とく・は・ほ

(五) 次の傍線部分のカタカナを漢字で記せ。(40)

- 1 肺にガンシユが見つかった。
2 板材をノコギリで引く。
3 堂内にボサツ像が安置されている。
4 長く変わらぬユウギを結んだ。
5 コトナカレ主義の人が目に付いた。
6 ギキョウシンに駆られて助太刀する。
7 客間のカモイに頭をぶつけた。
8 読者の関心をジャツキする。
9 麦のハシユ期が近い。
10 池にヒゴイが泳いでゐる。
11 前作をリョウガする出来栄えだ。
12 鮮やかな手綱サバきに感嘆した。
13 事実をユガめて報告する。
14 相手の剣幕に思わずヒルんだ。
15 ケイカクが取れて円満な性格になった。
16 モノスゴい人出だった。
17 セツコウを使って型を取る。
18 セツコウを出して偵察する。
19 新たな希望がワク。
20 場内が大いにワク。

準1級

解答欄を間違えないよう設問番号を確認してください。

氏名

(六) 次の各文にまちがって使われている同じ音訓の漢字が一字ある。上に誤字を、下に正しい漢字を記せ。

- 1 差少年ら奉祝の品を別送しましたのでご笑納くだされば幸甚に存じます。
2 山林に幽棲する墨念仁を以て自ら任じ京師の文化人に白眼を以て報いた。
3 国家転覆を企てた一味の渠怪を極刑に処するよう命ずる宣旨が下された。
4 繰り返し寸尺詐欺を働き巷間の噂に上っていた犯人が遂に逮捕された。
5 群青の空を指す白亜の灯台の羅旋階段を登ると紺碧の海が一望だった。

(七) 次の問1と問2の四字熟語について答えよ。(30)

- (1) 美俗 紫電 (6)
(2) 鳳雛 百尺 (7)
(3) 坑儒 中原 (8)
(4) 兔走 三者 (9)
(5) 事定 前途 (10)

問1 次の四字熟語の(1~10)に入る適切な(20)語を後の□から選び漢字二字で記せ。(2x5)

いっせん・うひ・がいかん
がりよう・かんとう・じゅんぷう
ちくろく・ていりつ・ふんしょ
りようえん

問2 次の1~5の解説・意味にあてはまる四字熟語を後の□から選び、その傍線部分だけの読みをひらがなで記せ。(10) (2x5)

- 1 亡国の嘆き。
2 家や建具、乗り物などを作る職人。
3 根本的な原因を取り除く。
4 見識が極めて狭いこと。
5 行動や運命を共にする。

土崩瓦解・掩耳盗鐘・梓匠輪輿
碩師名人・管中窺豹・釜底抽薪
麦秀黍離・一蓮托生

(八) 次の1~5の対義語、6~10の類義語を後の□の中から選び、漢字で記せ。□の中の語は一度だけ使うこと。

- 1 抗争 6 復活
2 碇泊 7 忽如
3 礼讚 8 経緯
4 消沈 9 突飛
5 豊稔 10 営営

対義語

類義語

がぜん・ききよう・ききようこう
けんこう・しし・そせい
てんまつ・ばつびよう・ほうとく
わぼく

(九) 次の故事・成語・諺のカタカナの部分を選択して漢字で記せ。(20) (2x10)

- 1 濡れ手でアワ。
2 シヤクシで腹を切る。
3 棚からボタモチ。
4 キコの勢い。
5 ジジヨの交わりを結ぶ。
6 大山もギケツより崩る。
7 ソウコウの妻は堂より下さず。
8 ミノ作る人は笠を着る。
9 七皿食うてサメクサイ。
10 燕雀安んぞコウコクの志を知らんや。

(十) 文章中の傍線(1~5)のカタカナを漢字に直し、波線(ア~コ)の漢字の読みをひらがなで記せ。(20) (2x5) (1x5)

A 浮世絵の板画が肉筆の画幅に見ると同じき数多の色彩を自由に摺り出し得るまでには幾多の階梯を経たりしなり。浮世絵木板摺りの技術は天津絵の板刻に始まり、菱川師宣の板画及び書籍挿し画に因りてゼンジに熟練し、鳥居派初期の役者絵出づるに及びて益民間の需要に応じ江戸演劇と相並びて進歩発達せるなり。然れども当時の板画は悉く単色の墨摺りにして、いまだ純然たる色摺り板物の名称を下し得べきものには非ざりき。(永井荷風「江戸芸術論」より)

B 春先から悩まされ通した筋向こうの建築場の性急な雨滴のような鑿や手斧の音は何時しか罷んで、カワイイはシインと鎮まっていた。埃っぽい風に硝子障子の唸らない日は、暗いというより冷たい深夜は、何物にも心を掻き乱されまいと勢い込むのであった。更に、肉の幸福を、浮き世の財を却けた、定まった形の何かが欲しい。が、結局、それは只漠然たる渴望ドウケイが夢想に過ぎぬ。不図われに還っては過去が自分を侵すだけである。一体、何のゆえに自ら好んでこんな憂畏苦痛の生活を拵んだのだらうと怪しみ疑い、不平不満の念に堪えなかつた。

兎も角、何を措いても、別れた妻の咲子が、まだY町の生家に、あの胴の瘦せた頭でっかちの特別に羽根の薄い黒トンボが無数に棲んでいる小暗いタケヤブに向かった長四畳の落ち間にも、肩身の狭い日々をくすぶっているとしたら、己が影——それは、咲子との生活をも、現在カツ子との生活をも、一様に、この上なく麗らかな日又日をかけて来ていて、私に揺曳する幸福に対する不可能性の影を、私は執念く投げかけているように思えて、どうぞして一刻も早く明るい日向へ、一足飛びに飛びのいて行ってモラわないことには助からないような、一種の自利心が強く働くのであった。(嘉村磯多「秋立つまで」より)